

# 英彦山修験道美術の復原および地理的関連性の考察

—今熊野窟磨崖仏、清水磨崖仏、青木磨崖仏—

A Study on the Regeneration of the Shugendou Art of Mt. Hiko and the Geographical Relative: the Stone Buddhist Reliefs of Imakumanokutsu, Kiyomizu, Aoki.

知足美加子  
TOMOTARI Mikako

## Abstract

The purpose of this study is the regeneration of the Shugendou art of Mt.Hiko, and the influence that Shugendou of Mt.Hiko gave to each area of Kyushu by analysis of the molding output of three-dimensional data. The subjects of survey are the stone Buddhist reliefs carved on the surface of natural rock in the Kamakura era: Imakumanokutsu in Mt.Hiko, Kiyomizu in Kagoshima, and Aoki in Kumamoto. The inscription of Kiyomizu to write down that a Buddhist monk of Mt.Hiko engraved it.

As a result, It is revealed that the damaged rocks of Imakumanokuthu ware engraved Amitabha and Bodhisattva of wisdom and the Goddess of Mercy. The size of three big Sanskrit characters on the rock face of Imakumanokuthu was different. And they have unique line engraving expression. It is supposed that people prayed for them from the high different places.

It is restored that the Sanskrit characters of Kiyomizu and Aoki on three-dimensional data. Difference in importance was recognized from engraved height or size. The possibility that Buddhist monk of Mt.Hiko carved Sanskrit characters of Aoki increased, because the artistic characteristic and religion concepts have many common points of Kiyomizu, Aoki, and Imakumanokutsu. These show that the faith zone to Mt.Hiko has spread through the whole Kyushu. At the time of these Sanskrit characters production, it falls on the time when Mongolia invaded and attacked in Korea and Song China. It is thought that this menace produced demand Shugendou art of Mt.Hiko.

## はじめに

福岡県にある英彦山（ひこさん）は、羽黒山（山形県）、熊野大峰山（奈良県）とともに日本三大修験山のひとつとされる。しかし明治維新の神仏分離令と廃仏毀釈<sup>1</sup>、修験道禁止令（1872年）によって、ほぼ伝統が途絶えている。明治期に仏教に関わる文化財の多くは人為的に破壊されている。本研究は英彦山修験道に関する意匠、および周辺環境の3D(three-dimensional)データ化を通して、風化損傷による欠損部分を補った修験道美術の全体像を復原するものである。また英彦山修験道が九州の各地域に及ぼした影響を、造形的な側面から検証する。

中世<sup>2</sup>より隆盛した修験道とは、日本古来の山岳信仰や道教、神道、仏教、天文学、医学等を融合して他者を救済しようとする宗教である。伝承については文字ではなく口伝を主とし、行（ぎょう：行為）そのものを重要視してきた。そのため文献資料が少なく、歴史的検証が難しい分野である。そこで修験道美術の中でも、行のひとつとして崖面を彫刻した磨崖仏に着目し、彫刻制作者である筆者の知見を活かしながら、修験道の文化観を明らかにしたい。

英彦山今熊野窟（通称・梵字ヶ岩）には鎌倉時代に制作された菩薩形磨崖石仏と、直径が250cm前後におよぶ3つの月輪大梵字が造形されている。これらは像名・像主・願文・制作年の全てを有する全国でも希な磨崖石仏である。磨崖石仏が存在する岩壁には銘文が刻まれており、嘉禎3年（1237）に阿弥陀三尊と月輪大梵字等が制作されたことが記されている。しかし、現在仏像については岩壁に一軀のみ残存している（写真1）。1983年に、磨崖石仏から約20m下の谷底から菩薩形石仏（

連絡先：知足美加子, tomotari@design.kyushu-u.ac.jp  
九州大学大学院芸術工学研究院コンテンツ・クリエイティブデザイン部門  
Department of Content and Creative Design, Faculty of Design, Kyushu University

写真2)が発見され、覆屋内に保存されている。この石仏は岩壁の磨崖石仏とスケールが相似しており、崩落位置からしても阿弥陀三尊の内の観音菩薩像であると考えられる。今熊野窟にはこれらの菩薩像を脇侍とする阿弥陀如来像が配されていたと推測されるが、主尊の遺物が遺されていないため、阿弥陀三尊として文化財指定を受けていない。そこでこれらを、3次元立体計測を用いて調査・分析し阿弥陀三尊の存在を実証する手掛かりとしたい。また英彦山と関連する九州地区の磨崖石仏を取り上げ、英彦山修験道が与えた影響と地理的連関を探り、その文化的価値を再評価することを目的としている。英彦山修験道との関連が考えられる磨崖仏として今熊野窟嘉禎三年銘磨崖石仏(以下、今熊野窟磨崖仏と略す)、鹿児島県清水磨崖仏、熊本県青木磨崖仏の月輪大梵字を取り上げる。月輪大梵字とは、月輪円相内<sup>3</sup>に仏そのものを表す梵字(種字)が、磨崖面に刻まれている石彫造形物をさす。各地域の月輪大梵字に共通する特徴として、自然の磨崖面に梵字が造形されており、雄大な景観を含むことがあげられる。修験道研究者の長野寛の調査によると、江戸時代には英彦山を信仰する檀家は長門国(山口県)から九州一円、琉球国(沖縄県)まで約42万戸にのぼった<sup>4</sup>。九州南部にある清水磨崖仏には、弘長4年(1264)に英彦山山伏が制作したことを示す銘があったとされる<sup>5</sup>。これは英彦山修験道の信仰圏が、中世において薩摩国(鹿児島県)等の九州諸国にまで及んでいたことを示す事例のひとつである<sup>6</sup>。青木磨崖仏には銘文が存在しないが、近隣には「英彦山」と称する史跡が存在する。また月輪梵字の意匠の傾向から、英彦山修験者が制作に関与している可能性が高い。

研究方法として、まず石仏や崩落岩盤を3次元ポータブルスキャナ(EXASCAN)で計測後、立体プリンター(Zprinter)によって立体化する。それらを崩壊前の姿に再構成し、制作時の文化的意義を探る。また高所の月輪大梵字についてはレーザースキャナ(Focus3D)により3D計測し、形状把握とスケールの比較を行う。3Dデータを美術史研究に応用する先行研究として、大西修也(2006年)、北郷悟(2010年)<sup>7</sup>等がある。発展過程にある3Dデータ化技術の中で、本研究においては小型化したポータブル3Dスキャナによって、これまで計測が難しかった険しい環境内の磨崖仏にアプローチすることができた<sup>7</sup>。また樹脂ではなく石膏による3Dプリンタの出力を行うことで、より精度の高い磨崖面の形状の復原が可能になっている。第1章では英彦山における今熊野

窟の文化的位置づけを行う。磨崖面に残された菩薩像、覆屋の観音像、磨崖面周辺の崩落岩石についての3次元計測結果を立体出力し、阿弥陀三尊像を中心に破損前の英彦山今熊野窟嘉禎三年銘磨崖石仏(以下、今熊野窟磨崖仏)の有り様を探る。第2章では、今熊野窟月輪大梵字について3Dデータ化を行い、スケールと意匠についての比較を行う。3つの月輪大梵字のうち左右のものにスケールの違いが確認されるため、その理由について文化的背景と遙拝位置の2点から考察を行う。第3章では、今熊野窟と清水磨崖石仏、青木磨崖石仏との造形的特徴と共通点について分析を行い、英彦山修験道と九州地域の文化的関連について明らかにする。

## 第1章 英彦山今熊野窟嘉禎三年銘磨崖石仏

### (1) 文化的位置付け

全国の山岳修験山のうち、比較的中規模の英彦山(標高1199m)に特別な価値が付加されたのは、中国大陸や朝鮮半島に近いという地理的要因が大きいだろう。公的仏教伝来(538年)の時期を前後して大陸の宗教観が英彦山に持ち込まれ(伝536年)、既存の山岳信仰と独自な方法で結びついていったと推測される<sup>8</sup>。その英彦山修験道の文化財は、明治期の廃仏毀釈の際、壊滅的な痛手を受けた。中腹にある高さ約7.9mの宝篋印塔(1817年)は、塔の中心部に刻まれていた梵字を削って「燈」の一字を入れ、蓮華の反り花に亀の甲羅の模様を付け、廃仏毀釈による破壊を免れた。このような時代背景にあって、今熊野窟の磨崖仏が、銘文と共に残存していることは希有なことである。今熊野窟の造形美術は、英彦山修験道の精神世界を考察するための重要な手掛かりといえる。「今熊野」という呼称は、永暦元年(1160)に後白河法皇が京都に三所権現を勧請し、今熊野神社を作ったことに端を発している。養和元年(1180)に、上皇はこの神社に対して全国の荘園28カ所を寄進した。そのうちの一つに「豊前国彦山」があり、熊野信仰が英彦山に入ったことが裏付けられている<sup>9</sup>。

英彦山には北岳、中岳、南岳の三つの峰があり、今熊野窟がある梵字ヶ岩谷は、南岳7合目付近に存在する。英彦山の表記について、古代は太陽信仰に基づく「日子山」であったものが、弘仁10年(819)法蓮によって「彦山」に改められ、享保14年(1729)霊元法皇より天下に抜きん出た霊山であるとして「英」の字が授けられ「英彦山」と称するようになった。弥勒菩薩が説法している兜率天の49宮殿に準え、英彦山には49

窟の霊場が存在する<sup>10</sup>。巨岩や窟そのものをご神体とする自然崇拜があったため、岩壁そのものに大規模な彫刻を施している事例は今熊野窟の他に見当たらない。北岳・南岳は呼称にも関わらず、南岳からみると北岳は東北東(方位角 63°)にあり、位置的には南北ではなくほぼ東西に並んでいる<sup>11</sup>。これには道教の星辰信仰(北極星、北斗七星に対する信仰)における北方位を重んじる思想と、太陽信仰を元に日が昇る東方位を重んじる思想が北岳を通じて結びついた、という説がある<sup>12</sup>。英彦山修験者にとって、天体の動きは信仰上の世界観と密接に関わっている。方位や天体への意識の高さは、第3章で述べる清水磨崖仏の造立動因にも関係する。

山内ではないが、英彦山の近隣(飯塚市)に養和二年(1182)に制作された筒野五智如来板碑(写真3)がある。高さ146cmの自然石に五智如来像<sup>13</sup>、英彦山三所権現の薄肉彫りと、八葉曼荼羅梵字の刷毛書き葉研彫りが刻まれ、背面に銘文が残されている。力強い筆運びや、鋭利で明確な梵字の表現が特徴的だ。既に平安時代後期から、本地垂迹(ほんじすいじゃく)や密教世界を磨崖梵字で表現する概念が、英彦山地域に存在していたことを物語っている。英彦山三所権現の「権現」とは、仏を本地として神が垂迹した信仰対象であり、神仏習合の本地垂迹思想を表すものである。この観念上、英彦山の北岳(法躰)の本地仏は阿弥陀如来(垂迹は天忍穗耳尊)、中岳(女躰)は千手観音(伊弉冉尊)、南岳(俗躰)は釈迦如来(伊弉諾尊)となっている。中でも北岳が最も重要とされている。

三所権現の概念は、今熊野窟の銘文にも記されている。この銘文は鎌倉時代の英彦山を語る重要な文章である。風化と苔のため判読が困難な部分は、3Dデータ化された銘文を多角度から観察し判読可能文字(下線部)を増やした(図1)<sup>14</sup>。銘文下部が破損しているが、九行目最後の文字を底辺と考えると、高さ約79×幅125cmの長方形の間に12行にわたり銘文が刻まれている<sup>15</sup>。

大勧進金對佛子  
奉書寫一字三礼如□□(法経)  
奉造石面阿弥陀三□(尊)  
奉建立三所権現  
奉彫石面月輪梵字大□(日)  
右志者为僧慶春師長  
貴賤靈等後生菩提及□(至)  
平等利益供養如件

嘉禎三年歲次丁酉六月十日

梵筆兩界院門

金對佛子僧

妙文房

2行目「奉書寫一字三礼(如法経)」という文章には、三礼しながら一字書くという「行為」が記されており、対象への畏敬や信仰の深さを思い詠ることができる。建築物の中に三所権現を奉ったという4行目「奉建立三所権現」という文章によって、今熊野窟に本地垂迹の思想が入っていることがわかる。しかし阿弥陀三尊(3行目)と月輪大梵字制作(5行目)に関して、本地垂迹(4行目)とは別行を設けて述べており、この2つの造形物は本地垂迹と並列する別概念で制作されたことがわかる。特に阿弥陀三尊への言及が前半に記されていることから、今熊野窟は阿弥陀信仰を主軸に造立されたことが推測される。

## (2) 阿弥陀如来像の復原

銘文の「奉造石面阿弥陀三□(尊)」という文章を裏付けるため、岩壁に残存する磨崖石仏(写真1:A)、覆屋の磨崖石仏(写真2:B)、落下岩石(写真4:C)について3Dデータ化し、仏像と周辺部の復原を行う。まず、菩薩像(A)向かって右上部分に二重の輪光の線刻が確認された。これは覆屋内の菩薩像(B)の光背(舟形拳身光)と比べると、曲線のアールやスケールが大きい。よってこの輪光は菩薩像(B)のものではなく、より大型の仏像(阿弥陀如来像)のものである可能性が高まった。

次に、崩落岩石(C)に残る線刻と菩薩像(A)の光背の線刻に注目する。菩薩像(A)の岩石、菩薩像(B)の岩石を合わせた上に、崩落岩石(C)を反時計回りに45度回転し組み合わせると、菩薩像(A)の下裳と舟形拳身光の線刻が、(C)の線刻と正確に繋がることわかった。この配置で、立体プリントした(A)(B)(C)を組み合わせさせた(図2)。組み合わせられた立体の形状を観察すると、中央に配された仏像の裳懸座上面の水平なラインや輪光の線刻、仏像向かって左肩から膝までのアウトラインが微かに確認できる(図3)。これらの要素を繋げると、中央に配されていた仏像は座像と推測される。中央に輪光を伴った主尊の阿弥陀如来座像、向かって右に舟形光背を伴った観音菩薩像(左脇侍:左手に蓮華の持物)、左に舟形光背を伴った勢至菩薩像(右脇侍:合掌する姿)を配置した「阿弥陀三尊像」と考えてよいだろう。向かって左上の頂髻部分、右側の耳輪から三道にかけてのアウト

ラインの凹凸が残されているため、頭部のスケールを確定することができた。これらの表面形状をもとに、阿弥陀如来像を想定して図像を描き(図4)、対象(C)の表面に阿弥陀仏座像と輪光を立体的に復原した(図5)。復原された阿弥陀像の全高は実寸で約198cm、像高は約136cmとなった。勢至菩薩像(A)の全高は約156cm、像高は約112cmであり、阿弥陀如来像のスケールは脇侍の菩薩像の約1.2倍であった。

菩薩像は岩壁のレベル(深さ)から、舟形拳身光を凹面に彫り込み、岩壁表面とのレベル差を利用して菩薩像を彫刻している。主尊の阿弥陀如来像も元々の岩壁表面のレベルを超えて陽刻されることはない。岩壁に残された光背の表面上のアールを延長して想定すると、阿弥陀如来像は実寸約25cm以内の深さのレベルで陽刻されていることがわかった。覆屋の観音菩薩像(B)も合わせた岩壁全体の形状を鑑みると、阿弥陀三尊像は岩壁の曲がり角にあたる凸面を利用して、主尊が前に競り出るように造形されている。放射線状に広がるように三尊が配置されており、実際より大きく迫力を感じさせる造形的な工夫がされていることがわかった。

『彦山流記』(鎌倉時代)<sup>16</sup>には「傍巖彫付阿弥陀三尊金色像」とあり、この阿弥陀三尊が金色に着色されていたことが記されている<sup>17</sup>。ベンガラ(酸化第2鉄を主成分とする赤色顔料)は焼く温度によって黄色顔料となる。着色は金箔ではなく、安価な黄ベンガラを使用したであろう。臼杵磨崖仏や青木磨崖仏にも着色を施していた形跡があり、中世の磨崖仏に着色を施すことは珍しくなかった。

しかし阿弥陀如来像のみが、薄く削がれたように紛失していることに、不自然さがある。八尋和泉は、明治47年7月の日付<sup>18</sup>がある『英彦山案内記』に今熊野窟の説明として「隣壁に三尊の影を刻み」という文章が残っていることをあげ、明治期までは阿弥陀三尊が残っていたのではないかと指摘している。廃仏毀釈の際、石像美術全体を砕くのではなく、首や顔等を部分的に破壊する例がしばしばみられる。仮に阿弥陀三尊像が磨崖面に明確に残っていたならば、『英彦山案内記』の作者は「影」という言葉を使わないのではないかと推測される。明治期の主尊の阿弥陀如来像は既に「人為的に削がれた状態」であり、主尊を破壊することで全体を破壊したと見立てた、と考えられる。現在の今熊野窟磨崖面そのものの崩落は、近年の自然崩壊によるものだろう。

2 躰の菩薩形磨崖石仏は、立体プリントによる検証の

結果、阿弥陀三尊像の一部である可能性が高まった。しかし勢至菩薩像(A)の衣紋に崩れがあること、またこの菩薩像と観音菩薩像(B)の顔の趣が異なることを複数の美術史研究者が指摘している<sup>19</sup>。その理由として中央(京都)からの距離や、左脇侍を重んじる仏教的思考から力のある仏師が左脇侍を彫刻したのではないかと、という見方がある<sup>20</sup>。これらの見解をもとに、同じ作者であれば違いが出にくい両脇侍の顔の形状に注目し、比較を行った。観音菩薩(B)は頭部に破損があるため、頭部半分の3Dデータを反転させて雌型(めがた)を作った。両脇侍頭部の雌型を、石粉粘土でキャストした(図6)。立体形状を比較すると、勢至菩薩(A)より観音菩薩(B)の方が若干頭頂は高い。観音菩薩(B)の顔は、切れ長の目を持ち、面長である。それに比べると勢至菩薩(A)の顔は顎が短く、より幼い童子の造形である。勢至菩薩像は常時風雨にさらされている状態とはいえ、やはり観音菩薩像制作者の力量の高さがうかがえる。しかし双方の菩薩像の体軀の張りや、丸みを帯びた童顔の造形から伝わる瑞々しい明るさは共通する。英彦山修験者が仏教的規範から比較的自由に造形解釈をし、同時期に違う制作者が阿弥陀三尊の両脇侍に関わったと考えるのが妥当であろう。

## 第2章 今熊野窟月輪大梵字

今熊野窟には3つの月輪大梵字が、岩壁表面に幅約17.5mにわたって刷毛書薬研彫りによって刻まれている(写真5)。岩壁の上部に巨大な磨崖梵字が配置されており、強い存在感を放っている。各梵字は磨崖面を円形に一段平に彫り窪めた月輪面に陰刻されている。梵字のアウトラインは線刻されており、断面からみると外側のエッジを鋭く際立たせ、内側はなだらかに処理されている。そのため、文字全体がかまぼこ型に陽刻されたように浮き出して見える(写真6)。また幅広の刷毛書の線(梵調)の中心に1本の線刻が施されており、この線が刷毛の豪快な動勢を強調している。薬研彫りの梵字は、高低差として梵調の中心が一番深く彫られている事例が多く、今熊野窟のように、アウトラインと中心に線刻を施しているものは希である。一般的なV字陰刻の梵字の空点および涅槃点<sup>21</sup>は、角の頂点からのびた対角線上に稜線が刻まれる場合が多い。しかし今熊野窟の場合、各辺の中点を結ぶ「十字」の線刻が刻まれている。この線刻によって涅槃点が四角形に分割され、安定感のある印象を与える。これらの線刻を利用した表現は、平坦な地形が

殆どない今熊野窟における作業効率をあげ、かつ梵調の占める割合を広げる効果がある。

今熊野窟月輪大梵字のスケールは大きく、清水磨崖仏の約 1.5 倍、青木磨崖仏の約 2.3 倍もある。これは険しい梵字ヶ岩谷の景観とのバランスを考慮した結果であろう(写真 7)。遙拝場所は「梵字直下の窟(現在通行不能だが、空中撮影および崖を登り踏査を行った)」と「約 20 m 崖下の登り口」の双方を想定したのではないだろうか。この線刻は直下から見上げても、崖下から離れて眺めても、梵調の中心部分を認識することができる。

実際にレーザー測量によって 3D データ化を行ったところ(図 11)、胎蔵界大日如来は直径約 269cm(約 9 尺) 釈迦如来は直径約 228cm(約 7 尺 7 寸) 阿弥陀如来は直径約 200 cm(約 6 尺 7 寸) となった<sup>22</sup>。中心と左の梵字の直径の差は 41cm(約 13 寸)、左の梵字と右のものとの差は 28 cm(約 9 寸) となる。中央の胎蔵界大日如来の梵字が最も大きく、この梵字が重要だったことについては明らかだが、左右の梵字のスケールの差の根拠は定かではない。中央に胎蔵界大日如来を配したことは、金剛界曼荼羅世界である宝満山に対して、英彦山が胎蔵界と見立てられたことに関係あるだろう。『彦山流記』の記述を参考にすると、今熊野窟の三つの月輪大梵字の中心は胎蔵界大日如来(アーンク) 向かって左が釈迦如来(バク)、右が阿弥陀如来(ア、またはキリーク) となる。これらは英彦山や熊野三山(阿弥陀如来、薬師如来、千手観音)とも一致せず、今熊野窟にこれらの梵字が配された意図は定かではない。

今熊野窟の月輪大梵字の種字の選択や配置に関して、明確な根拠を示す資料は存在しないが、齊藤彦松の種子字研究の中で、最も信仰をあつめた八仏を選定したものがある。齊藤によると、日本における仏教の根本仏は「大日如来、釈迦如来」であり、二大信仰仏は「薬師如来、阿弥陀如来」である。根本仏が信仰仏よりも重要度が高い。この弁別を参考にすると、今熊野窟の月輪梵字の釈迦如来は、大日如来と並ぶ根本仏として阿弥陀如来より大きく表現されたということになる。鎌倉仏教の主流は、顕密仏教(顕教:釈迦の教え、密教:天台宗・真言宗)であったという説がある。特に顕密一致を説く天台密教に影響を受けている英彦山は、釈迦如来を重要視したと推測される<sup>23</sup>。

一方、形而上的観点とは別の見方になるが、左右の月輪の径の差が約 29cm と僅差であることから、遙拝する場所を考慮した可能性も見逃せない。左右の梵字がパー

スによって同直径に見える位置を探したところ、現在落下した観音像を納めている覆屋付近であることがわかった。ここは、今熊野窟に登る鎖場の登り口にあたる。この場所から遙拝することを想定し、意図的にスケールの違いを与えた可能性も充分考えられる。

以上、英彦山今熊野窟嘉禎三年銘磨崖石仏の 3D データ化による復原と文化的考察を行った。英彦山修験道の天体への意識、自然信仰、阿弥陀信仰、本地垂迹思想、顕教・密教思想等が融合した宗教的世界観を俯瞰することができた。

### 第 3 章 清水月輪大梵字と青木磨崖仏群の文化的位置付け

#### (1) 清水月輪大梵字

清水磨崖仏群は、鹿児島県南九州市の清水川右岸に高さ約 20m、長さ約 400m にわたる岩壁(凝灰岩)に、五輪塔群、梵字群、宝篋印塔群、仏像群等、約 200 基が彫刻されている(写真 8)。これらは平安時代末期から明治時代にかけて、漸次的に制作されたものである。屏風状の岩壁の約 10 m の高さに 3 つの月輪大梵字が刷毛書薬研彫りで彫刻されている(写真 9)。

向かって右から薬師如来(バイ)、計都星(ケー)、不動明王(カーン)である。計都星は彗星を表す。クレーンを使用した実測によると、薬師如来と不動明王の梵字直径が 171cm、計都星が 150cm であった。制作者、制作年の根拠である銘文部分は剥落しているが、寛政年間(1789-1801 年)に編纂された『河邊名勝誌』には銘文の内容が残っている。この記録によると、本来大梵字は 5 つあり、弘長 4 年(1264)に英彦山山伏によって彫刻されたとある。当時の英彦山と薩摩国の関係は深く、英彦山権現の信者(檀那)獲得が南九州に及んでいたことを裏付ける記録が彦山側にも残っている(長野寛 1987 年)<sup>24</sup>。薩摩国の英彦山信仰の厚さは、明治期に行われた檀那あたりの課税額にも表れている。明治 6 年(1873)に、明治政府が英彦山の檀那所有に対する課税を行い、各地域(の布施額等)によって額に等級をつけた。長野が作図した地域別の等級によると(図 8)、薩摩国は遠方にも関わらず第 4 等級になっていることがわかる(後述する玉名国は第 5 等級)。清水磨崖仏がある薩摩国には、英彦山への厚い信仰が根付いていた。

齊藤彦松の研究により、剥落した梵字は日食や月食を表す羅喉星(ラー)と、毘沙門天(バイ)であると推定された。薬師如来を中心に不動明王と毘沙門天の梵字が、



写真1 《今熊野窟菩薩像》(A)  
1237年 福岡県田川郡添田町英彦山



写真2 《覆屋内の菩薩像》(B)



写真3 《筒野五智如来板碑》  
1182年 福岡県飯塚市

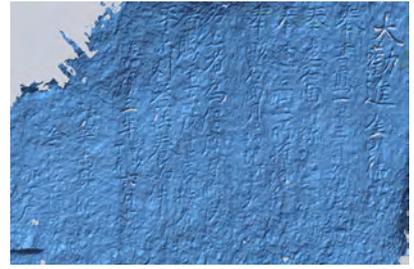


図1 《今熊野窟銘文 3D データ》



写真4 《磨崖面手前の崩落岩石》(C)

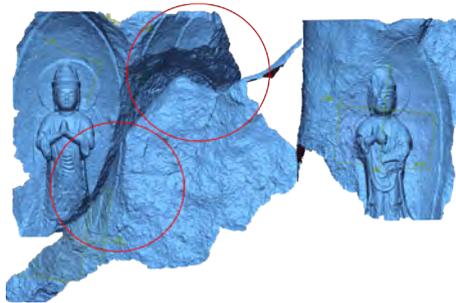


図2 《阿弥陀三尊像 3D データの組み合わせ》  
\* 左から (A)(C)(B)。朱線内は組み合わせの手がかり。



図3 《阿弥陀三尊像 3D 出力立体の組み合わせ》  
\* 朱線は光背の痕跡。青線は如来像の痕跡。



図4 《阿弥陀三尊像想像図》



図5 《阿弥陀三尊像想像図》石膏と石粉粘土



図6 《菩薩像頭部の比較》



写真5 《今熊野窟月輪大梵字》



写真6 《月輪大梵字・胎藏界大日如来部分》



写真7 《今熊野窟と覆屋》

当時凶兆であった彗星や、日食・月食を封じ込めるように配されていたという<sup>25</sup>。レーザー計測による清水月輪大梵字の3Dデータ<sup>26</sup>を多方向から確認し、崩落した梵字の痕跡を探した(図9)。(図9-a)は梵字周辺を上からのアングルでみたものである。磨崖面付近は意図的に屏風状に整えられている。実線は、形状が明確に残っている部分である。その角度を保ったまま平行移動し、主尊である薬師如来がある面を基準にして崩落した磨崖面を想定したものが(図9-b)である。羅候星の梵字について、向かって右上の部分は比較的破損が少ないことがわかった。3Dデータ上では、かろうじて2画分の梵調中央の陰刻が確認できる(図10、破線・痕跡線は筆者)。毘沙門天梵字部分は破損が大きく、梵字痕跡は全く確認できない。おそらくこの梵字の下に銘文が刻まれていたのだろう。銘文には「彦山住伴侶□□坊敬白、右奉上写梵字志者、為法界衆生平等利益之状如件、弘長四年甲子二月」と刻まれていた。「平等利益」という文言は前述した英彦山今熊野窟の銘文内にもあり「一切の衆生が仏に成り得る」という阿弥陀信仰の平等主義を表している。今熊野窟の銘文表記に倣うならば、崩落した毘沙門天の梵字下約80×50cmの空間に、向かって右より4行の縦書きで記されていたと推測される。筆者の想像になるが、清水磨崖仏群の「屏風状の磨崖面」について、英彦山垂迹の始めとされる八角の水晶石(湧水の始め)の形状に関係あるのではないかと考えている。清水月輪大梵字3Dデータ(図9-a)の屏風型形状岩壁の各角度が約130-139°(正八角形の内角は135°)になることがその根拠である。英彦山の垂迹については次項で述べる。

当時の古代史を精査した上村純一は、実際に彗星が1264年7月から12月までの比較的長い期間現れたとしている<sup>27</sup>。そうであるならば、清水月輪大梵字は、史実に記されている彗星登場の期日より5ヶ月前(同年2月)に制作が完了していることになる。弘長年間(1264年2月28日に文永に改元されており、銘文の期日記載の間違いは考えられない。英彦山山伏が彗星にいち早く気づいたとしても、清水磨崖仏まで直線距離約240kmの道のりを移動する日数を鑑みると、十分な制作時間を割いていないことは明白である。何かの異変に対して素早く反応し、行動することに価値を置く英彦山修験者の姿が浮かび上がる。計都星梵字は実際の彗星でなく、当時の社会不安そのものを「凶兆」として表現した可能性を視野にいれなければならない。

## (2) 青木磨崖仏の文化的背景

熊本県玉名市の青木磨崖仏は、菊池川流域の青木熊野坐神社の境内にある。屏風のような形状の凝灰岩岩壁に高さ約6m、幅約15mの範囲に複数の月輪大梵字が刻まれている(写真10)。伝承では幅20m連続していたとされるが、北方岩石が欠落し、梵字破片が平置きされている状態である。5つの大型の崩落岩は垂直方向を保った状態で下方にずれ落ちている。磨崖面はところどころに赤い部分がある。安山岩と違い凝灰岩は赤く変色しないことから、意図的に彩色を施したとされている。

現在岩壁に確認できる梵字は12字(図11)あり、そのうち9字は大型の崩落岩の上に彫刻されている。

田添夏喜(1971年)と斉藤彦松(1979年)<sup>28</sup>の解説を参考にすると(図11)内の表記(1)はバク(釈迦如来)、(2)はキリーク(阿弥陀如来/千手観音)、(3)はカマー(俱利伽羅竜王)、(4)はバーンク(金剛界大日如来)、(5)(6)(7)はキリーク、サ、サク(阿弥陀三尊:阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩)、(8)はアク(釈迦如来/不空成就)、(9)はウン/ヲウン(唵字:真言や陀羅尼の冠頭に置かれる)、(10)はバク(釈迦如来)、(11)はバーイ(薬師如来)、(12)はアビラウンケン(大日如来真言/双圓性海塔<sup>29</sup>)となる。複数の仏名があるのは、解釈によって諸説あるためである。銘文は存在せず、制作年・制作者共に不明である。田添と斉藤は、彫法や梵字の配置から鎌倉時代の天台系修験者達によるものと推測している<sup>30</sup>。西田道世(2013年)は、俱利伽羅竜王梵字制作には英彦山修験者が関わったのではないかと述べており、今回の解説における手がかりを与えてくれた<sup>31</sup>。

青木磨崖仏から約500m離れた溝上地区の丘の頂上に「英彦山」とよばれる祠(写真11)が存在し、地域住民によって大切に祀られている。さらに青木熊野坐神社境内には、祠(英彦山)のご神体に、同岩質(花崗岩)で、形状がよく似ている舟形の石造物が設置されている。これらの由縁は不明だが、祠「英彦山」は、英彦山修験と青木磨崖仏との繋がりを示すものと考えられる。

青木磨崖仏の宗教文化観を探るため、磨崖面を崩落前の状態に復原した。最も尊称の高いもの、重要視されたものが高い場所、もしくは大きなスケールで表現されているはずである。玉名市社会教育課文化係が作成した実測図をもとに、制作当時のレイアウトを復元したところ(図12)のようになった。最も高い位置に須弥壇を備えた阿弥陀三尊(5-7)があることから、これらは青木梵字磨崖仏において重要な表象であったことがわかる。

西田(2013年)は彫り方と筆法から成立時期を4つに分類して分析している。彼は修験者が阿弥陀三尊を一緒に彫ることはないこと、また青木の善無畏三蔵伝説から、阿弥陀三尊梵字は真言系浄土教集団が彫ったとしている<sup>32</sup>。しかし前述したとおり英彦山今熊野窟には阿弥陀三尊磨崖仏の造形が存在する。特に俱利伽羅窟近くの岩には、舟形に彫り窪めた面に阿弥陀三尊種字を陰刻した磨崖仏が存在する。筆者は、阿弥陀信仰を旨とする英彦山修験者(天台系修験者集団)の2つの集団が青木磨崖仏を制作したと仮定した。特に阿弥陀如来の表象に複数の宗教的意味を重ねることで、その価値を高めていると考えている。

平安後期の1180年には、英彦山に熊野信仰が入っていたことは既に述べた。熊野三山と英彦山の共通点をまとめると、まず中心となる本地仏が阿弥陀如来であること。次に天台系修験の場であること。最後に「水(川)」という要素である。これらと青木磨崖仏(青木熊野座神社)との関連を含め考察してみる。

まず阿弥陀如来に関してだが、熊野本宮は3つの川の合流点にある「大斎原(おおゆのはら)」と呼ばれる中洲にあった(明治期に洪水のため移築)。死と向き合う場であり、阿弥陀如来の浄土そのものとされていた<sup>33</sup>。英彦山において最も尊称が高い北岳の本地仏は阿弥陀如来であり、今熊野窟には阿弥陀三尊の磨崖仏が彫刻されている。青木磨崖仏群においても、阿弥陀三尊は最も高い位置に彫刻されていた。

次に天台系修験道との関係だが、熱心な熊野信仰者であった後白河法皇の熊野御幸の先達をつとめたのは、天台系修験道者(熊野三山検校・増誉)であった。英彦山は本山派(天台宗)ではなく「天台修験別山彦山派」(1695年)となるものの、古くから天台密教を重んじてきた。天台との関係は、英彦山権現が中国の天台山から訪れたという『彦山流記』の記述にも残る。青木磨崖仏には鎌倉期の宗派を示す文献が残っていないが、複数の磨崖梵字を並列する表現方法に天台密教からの影響をみる。

最後に水(川)との関係だが、川の中州にあった熊野本宮と、菊池川沿いの青木熊野座神社は、景観として通じるものがある。屏風状岩壁の手前に川があるという青木磨崖仏群の景観は、清水磨崖仏とも近似している。これらの宗教史跡は、傍にある川(熊野本宮は主流となる熊野川)に対していずれも西側に位置しており、死者が向かう西方極楽浄土との関連が考えられる。

英彦山もまた水との関係は深く、山自体が水分神(みくまりのかみ)として信仰を集めている。『彦山流記』には、般若窟(俱利伽羅窟)に第一剣(八角の水晶石)が天降り、清水が流れ出たことが垂迹の始めとされ、この窟から俱利伽羅(龍)が宝珠を口に含んで出てきたと記されている<sup>34</sup>。青木熊野座神社には、この俱利伽羅竜王の梵字が刻まれている(写真12)。現存する梵字群の中ではスケールの最も大きな造形(高さ約353×幅123cm)であり、俱利伽羅竜王を重んじている制作者の意図が伺える。

以上、阿弥陀如来を重んじる姿勢や、天台密教との関係、水と関係する地勢等から、熊野本宮と英彦山、青木磨崖仏との関連、および英彦山修験者による青木磨崖仏制作の可能性を示した。

制作方法の違いを優先して(図12)の青木磨崖仏12文字を、第1-A期(5)(6)(7)、第1-B期(4)(8)(10)(11)、第2-A期(1)(2)(3)、第2-B期(9)(12)と分類する。先行研究では第1期の制作を英彦山修験者としているものはない。しかし、英彦山修験者が制作した清水月輪大梵字との造形的相似(屏風状の磨崖面。鋭利で力強い薬研彫り等)を根拠として、青木磨崖仏第1期にも英彦山修験者が関わった可能性を示したい。

第1-A期は、直径80cm前後の月輪を彫り窪め、刷毛書き薬研彫りで力強く表現されているものである。幅約1cmの平鑿の跡が残る。順序としてはまず最も高い位置

に須弥壇を備えた阿弥陀三尊(5-7)を彫刻する。

その後第1-B期に、同じ制作者集団が金剛界大日如来(4)、不空成就如来(8)、釈迦如来(10)、薬師如来(11)の梵字を彫る(図12緑破線部分)。これは平安時代の顕教四仏(弥勒菩薩、薬師如来、釈迦如来、阿弥陀如来)と金剛界四仏が混合したものである。顕教四仏は密教の影響を受け、種子が置き換わることがあった(青木磨崖仏の場合、北の弥勒菩薩が不空成就如来に置き換わっている<sup>35</sup>)。前述した「筒野五智如来板碑」が示す通り、平安後期から方位と仏を連動させる考え方は英彦山修験道に存在していた。青木磨崖仏においては、阿弥陀三尊や金剛界四仏といった宗教的概念を複合的に重ねることで、阿弥陀如来の重要性を強調しているのかもしれない。

第2-A期は、比較的細い梵調で、彩色されたバク(1)、キリーク(2)、カマーン(3)の梵字群である。斎藤彦松の見解において、(1)(2)の種字は発遣(はっけん)釈迦と迎接(ごうしょう)弥陀、つまり浄土に送迎する如来

の組み合わせとしている。一方、英彦山との関連からみるならば、既存の阿弥陀如来の梵字と組み合わせた梵字の並びが、英彦山三所権現と位置的に一致する（図12赤実線部分。北岳：阿弥陀如来、中岳：千手観音、南岳：釈迦如来）。この解釈からすると、阿弥陀如来の表象には「阿弥陀信仰」「顕教四仏（金剛界四仏）」「本地垂迹」という3重の意味が付加されていることになる。俱利伽羅竜王梵字は、現存する青木磨崖仏の中でも最も大きく装飾的である。梵字下に蓮華座を彫刻しており、この梵字が重視視されていることを示している。この3つの梵字は、浅い彫りと装飾性、彩色という点で英彦山今熊野窟の月輪大梵字と共通性をもつ。これらを今熊野窟と同時期の制作と考えるならば1240年代頃、鎌倉中期の造立となる。

第2期-Bは(9)ウン<sup>36</sup>と(12)アビラウンケンである。時期は違えるが彩色や梵調から第2期-Aと同じ制作者集団の作風と認められる。(9)のみ月輪が線刻であるのは、この梵字が仏そのものではなく俺(オン)という神聖な語を示す、という宗教的意味の違いと考えられる。俺は真言の巻頭に置かれるもので、(9)と(12)と合わせると胎蔵界大日如来の真言となる（図12青実線部分）。これは他の梵字と離れているものの、俱利伽羅竜王とほぼ同じ高さに位置していることがわかる。英彦山が胎蔵界と見立てられ、今熊野窟で胎蔵界大日如来の月輪梵字が中心であったことを想起すれば、これらの梵字制作に英彦山修験者関わっている可能性は十分ある。

造形的特徴としては、第1期の月輪梵字は英彦山今熊野窟ではなく清水磨崖仏のものに近い。これを軸に時期設定をするならば、第1期を鎌倉中期、第2期を鎌倉後期とみることもできる。

青木磨崖仏付近の菊池川流域には古墳が多い。古代には菊池川を利用して、ここから石棺用の凝灰岩を切り出し、運搬していたという<sup>37</sup>。穏やかな有明海から菊池川のルートを利用して、平安後期から中国を相手とした海外交易が行われていた。玉名市小岱山麓で砂鉄を利用した「たたら製鉄」が古くから行われており、輸出品には刀などの鉄製品が多く含まれていた<sup>38</sup>。石工に必要な鉄製造具類、鉄を主成分とするベンガラも生産されていたはずである。鎌倉時代には活発な交易を通じて、当時の中国の社会情勢もいち早く伝わっていたことだろう。清水磨崖仏手前を流れる万之瀬川（昭和期まで上流の名称は清水川であった）河口にも、中世における中国との交易ルートがあったことがわかっている<sup>39</sup>。交易と共に大

陸文化が流入する一方で、蒙古襲来への危惧が、加持祈祷を行う英彦山修験の需要を高めたのではないだろうか。

おわりに

本論では、3Dデータ化による英彦山今熊野窟磨崖仏、清水磨崖仏、および青木磨崖仏の調査分析を行った。まず、ポータブルスキャナによって計測したデータから、今熊野窟磨崖石仏横の銘文の解読を試み、判読可能文字を増やした。また崩落した岩石群の3Dデータを、縮小して立体プリンターで出力し、破損前の形状の復原を行った。その結果、磨崖面に残された勢至菩薩像、覆屋内の観音菩薩像を両脇侍とする阿弥陀如来座像が、崩落した岩石の表面に全高約198cm、像高約136cmのスケールで彫刻されていたという推測に辿り着いた。阿弥陀三尊像は岩壁の曲がり角にあたる凸面を利用して、主尊が前に競り出るように造形されていた。このような芸術的観点からの工夫は、梵調の中心部に線刻を施す等の月輪大梵字の彫刻方法にもみられた。3Dデータ化から3つの月輪面の直径の計測を行い、中央の胎蔵界大日如来の梵字が最も大きく、次いで磨崖面向かって左の釈迦如来と続き、向かって右の阿弥陀如来は最も小さいことがわかった。スケールの違いの根拠については、重要度の違いを表現しているか、もしくは遙拝する位置を配慮した可能性について言及した。

英彦山修験者が制作した鹿児島県の清水月輪大梵字について、3Dデータを上部からみて、崩落した磨崖面形状を予測した。破損した羅候星梵字の痕跡が微かではあるが確認された。屏風状の磨崖面についても『彦山流記』の記述との関係から述べた。

青木磨崖仏について3Dデータ化によって崩落前の磨崖面を復原し、阿弥陀如来を重視した天台系英彦山修験の世界観を示している可能性を示した。また造形的な特徴から12の梵字群の制作時期を2つに分け、阿弥陀信仰、金剛界四仏、本地垂迹思想、俱利伽羅竜王への崇敬、胎蔵界大日如来真言といった思想的背景から言及した。ひとつ疑問として残るのは、英彦山修験者が関わっていたならば、なぜ銘文を刻まなかったのかということである。漸次的に彫り進めたためか、もしくは銘文が北方岩石と共に崩落したためなのだろうか。この点については、今後も調査を進めたい。

本論は、修験道が阿弥陀信仰と深く結びついていたことを、造形的な観点から明らかにした。磨崖仏造立の動



写真8《清水磨崖仏》鹿児島県南九州市川辺町清水



写真9《清水月輪大梵字》1264年

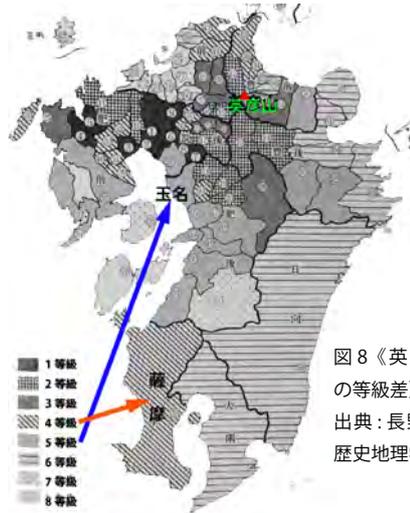


図8《英彦山信仰圏（檀那場）の等級差》1873年  
出典：長野覚『英彦山修験道の歴史地理学的研究』

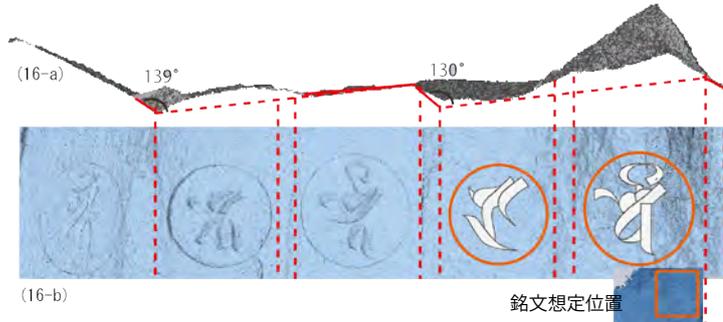


図9《清水月輪大梵字 3Dデータ上の想像図》



図10《清水月輪大梵字崩落部分の梵字痕跡》

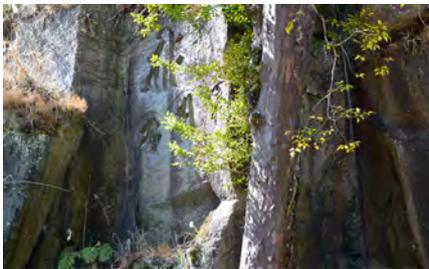


写真10《青木磨崖仏》熊本県玉名市青木熊野座主神社



図11《青木磨崖仏壁面実測図》  
出典：玉名市社会教育課文化係「玉名市における文化保護の取組み」1999年



写真11《英彦山》熊本県玉名市溝上

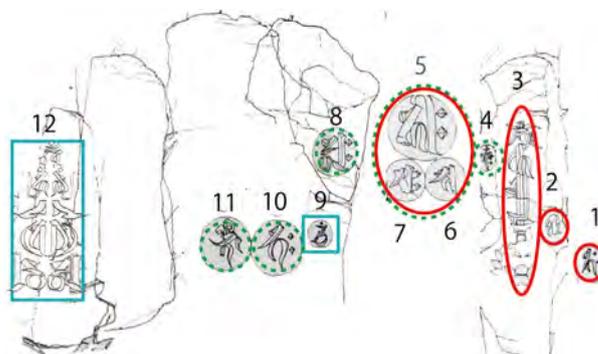


図12《青木磨崖仏壁面実測図による崩落以前の想像図》



写真12《俱利伽羅竜王梵字と 3Dデータ》

因に「死」への強い意識が垣間見える。山に籠る祖霊への信仰や、修験道における擬死再生<sup>40</sup>の概念を鑑みると、浄土観と修験道との親和性に気づく。

さらに、今熊野窟磨崖仏、清水磨崖仏、青木磨崖仏の造立動因が、九州と大陸との関係にあることを示した。英彦山今野窟磨崖仏は1237年、清水磨崖石仏は1264年に作られている。この時期、モンゴル軍が高麗王朝(1231-1273年)、および南宋(1235-1279年)に対し侵攻を行っていた。その後、モンゴル軍が「文永の役」(1274年)、「弘安の役」(1281年)として北部九州に攻めてきている。これらの宗教史跡の所在地はいずれも、古くから大陸との活潑な交流が行われていた場である。末法思想だけでなく、大陸からの脅威を封じ込めようとする目的意識が、月輪大梵字を含む磨崖仏造立を促したのではなかろうか。モンゴル軍の侵攻という事実を、凶兆の象徴である彗星や日・月食に見立て封じ込めた可能性は皆無ではない。そう考えるならば、実際の彗星登場より先に、清水月輪大梵字の制作が完了していたことにも納得がいく。もし清水月輪大梵字制作完了後に、実際に彗星が登場したとするならば、英彦山修験道の霊威は非常に高まったであろう。

口伝を旨とし文献資料が少ない修験道文化ではあるが、当時の精神性は造形の中に如実に残されている。今後は、九州地区の宝満山、求菩提山、臼杵地方等を調査対象に加え、大陸との関係を鑑みながら英彦山修験道美術についての研究を進める予定である。

## 謝辞

本稿の執筆中、長野覚先生(日本山岳修験道学会顧問)にはご支援とご指導を賜り深く感謝しております。大西修也先生(九州大学名誉教授)の日韓古代彫刻復原に関する先駆的なご研究は、本研究の大きな導きとなりました。謹んで御礼申し上げます。井形進氏(九州歴史資料館)、岩本教之氏(添田町役場)、南九州市教育委員会の皆様、末永崇氏(玉名市教育委員会)、竹之内和樹准教授、吉永幸靖助教、石井達郎助教(九州大学)には専門的知識提供を賜り心より感謝申し上げます。(株)久永、鶴巻史子氏、池浦和彦氏、富田勇人氏、丸山智央氏(九州大学博士課程)には厳しい環境での計測等支援下さり感謝いたします。

## 註

1. 明治元年(1868)明治政府によって出された古代以来の神仏習合を禁じた命令(太政官布告、神祇官事務局達、太政官達)。これにより全国に廃仏毀釈運動が起こった。
2. 本論における中世とは、荘園公領制が存在した12世紀末から16世紀末頃と位置付けている。修験道の成立については、平安時代後期頃一つの宗教形態をとるにいたったとされている。宮家準

- 「修験道の歴史と役行者」『役行者と修験道の世界』毎日新聞社、1999年p.171
3. 仏教における月輪とは満月であり、完全無欠であることの象徴、および仏や仏の知恵を表すものである。
  4. 長野覚『英彦山修験道の歴史地理学的研究』名誉出版、1987年pp.299-309
  5. 清水磨崖石仏は月輪大梵字三文字の横の二文字と銘文は剥落しているが、寛政年間に編纂された河邊名勝誌には銘文の内容が残っており、弘長四年(1264)に彦山山伏によって彫刻されたとある。資料閲覧協力・南九州市教育委員会文化財課
  6. 広瀬正利『英彦山信仰史の研究』文献出版、1994年pp.108-149
  7. 大西修也「デジタル技術を応用した日韓古代彫刻資料の保存と復原に関する研究」(研究成果報告書)2006年、北郷悟「《女》3Dデータからブロンズ鋳造まで」『ラグーザと荻原塚山』東京藝術大学、2010年pp.40-41
  8. 英彦山には、継体天皇25年(536)、中国(魏)の善正法師が開いたという伝承がある。
  9. 八尋和泉「今熊野窟の嘉禎三年銘磨崖仏」『英彦山修験道館展示資料』1987年p.35
  10. 『彦山流記』(鎌倉時代)には以下のように記されている。「四十九箇窟各御正鉢分権現并守護天童奉安置之、即言万十万金剛童子是也」
  11. 国土地理院提供「距離と方位角の計算式」
  12. 朝日新聞西部本社『英彦山発掘』葦書房、1983年pp.17-20
  13. 五智如来とは「大日・阿闍・宝生・阿弥陀(無量光)・不空成就」であり、それぞれ方位と連動している。(中心、東、南、西、北)
  14. 判読不能文字の推定部分は、根来昭仁(1983)と八尋和泉(1987)が解説した先行研究を参考にしている(□で表示した後の括弧内表記)。
  15. 異体字として「彫」は旁を「久」、「等」は「ホ」に近い形で表記されている。
  16. 彦山流記には建保元年(1213)の紀年があるが、嘉禎三年(1237)銘石仏の記述があるため、紀年については議論が続いている。
  17. 添田町『彦山流記』葦書房、1993年p.57
  18. 9)前掲書p.33『英彦山案内記』の出版年に関して、明治47年は大正3年(1914)であるが、記載されたままを引用している。
  19. 大西修也「磨崖石仏と金剛如来立像」『英彦山発掘』葦書房1983年p.110、15)前掲書p.39
  20. 井形進(九州歴史資料館学芸員)、長野覚(日本山岳修験道学会顧問)、岩本教之(添田町役場)から知識提供を得ている。「調査報告会」2013年9月20日添田町役場
  21. 空点とは梵字上部に付く鼻音化記号、涅槃点とは右側に付く氣息音記号、修行点とは右肩に付く長音化記号である。綜芸舎編集部編『梵字入門』綜芸舎1967年pp.3-4
  22. 大宝律令(701年)から永正年間(1504年～)頃までの小尺29.6cmを元に算出。知足美加子「3Dデータ化による修験道美術の再現-英彦山今熊野窟を中心に」(『第34回日本山岳修験学会資料集』日本山岳修験道学会、2013年p.38)においては、月輪大梵字に関して画像処理による3Dデータを用いたが、その後(株)久永協力のもとレーザー計測を行い数値を若干修正している。
  23. 齊藤によると、1.中央日本仏教根本仏「大日如来、釈迦如来」、2.二大信仰仏「薬師如来、阿弥陀如来」、3.二大信仰菩薩「地藏菩薩、観世音菩薩」、4.二大護法尊「毘沙門天(多聞天)、不動明王」と分類される。根本仏が最も重要度が高く、順を追って脇に配される(齊藤彦松「清水磨崖五大梵字」『南九州の石塔第9号』南九州石塔研究会1997年p.18)。中世において顕密仏教が主流であったとする根拠は、巨大な荘園領主であった比叡山延暦寺・東寺・醍

- 鬮寺・東大寺・興福寺等が顕密寺院であったことによる(岡野友彦『院政とは何だったか』PHP新書 p.133)。
24. 彦山泉蔵坊文書(1567-73年)の中に、5通の「大間帳」と記された書状がある。これは地方から彦山参詣を行う各信者の系譜を確認するもので、5件のうち4件が薩摩国出身者のものであった。(4)前掲書 pp.299-309
  25. 齊藤彦松「清水磨崖仏群の調査」『川辺町文化財調査報告書』川辺教育委員会 1997年
  26. データ提供:(株)久永。南九州市教育委員会。
  27. 上村純一「鹿児島県清水磨崖仏群月輪大梵字造立動因に関する一考察」『人類学研究第9号』欺文堂 1997年 p.6
  28. 田添夏喜「青木磨崖梵字群」1971年、齊藤彦松「青木磨崖梵字群の研究」『宗教研究』宗教研究会、1979年 pp.288-290
  29. 胎蔵界大日如来の真言を向合せにして、五輪塔の形で表現したもの
  30. 真言系修験の場合は、大日如来を中心とした思想体系であるが、天台系修験は大日如来と同様、顕教である釈迦如来や、薬師如来などの諸仏も重んじる傾向がある。
  31. 俱利伽羅竜王を本尊としている寺は犬鳴山七宝瀧寺しかない。西田道世「青木磨崖梵字群は何を語るか」歴史玉名、2014年 pp.23-34
  32. (31)前掲書 p.33
  33. 熊野三山の各本地は阿弥陀如来(本宮)、薬師如来(新宮)、千手観音菩薩(那智)となる。
  34. (17)前掲書 pp.7-24
  35. 石井進『石仏と石塔』山川出版社、2001年 pp.62-63
  36. 唵(オン)とはインドで古来より聖音とされ、祈りや経典の最初に唱えられる言葉。密教に取り入れられ、真言や陀羅尼の頭首に置かれる。
  37. 高木恭二「菊池川流域の古墳」『マロ塚古墳出土品を中心に古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集、2012年 pp.521-523
  38. 玉名市立歴史博物館ころピア編『玉名市史通史篇上巻』玉名市 2005年 pp.147-151, pp.431-436
  39. 国立歴史民俗博物館「万之瀬川下流域研究会の結果報告」2007年
  40. 擬死再生とは、修験道において、仮に死ぬということによって罪や災難を滅ぼし、汚れのない生命として生まれ変わるという概念である。山中に入るとは、死んで地獄の責苦を果たし、浄土へと入ることを意味すると考えられていた。



